

# フランス革命下の音楽

2011年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会  
(音楽学研究コース・音楽情報社会コース) 専門ゼミⅡ

皆さんは、音楽と政治という二つの事柄を結びつけて考えたことがありますか？「政治って聞いただけで頭が割れそうだ」とか、「そんな小難しいこと考えなくても、音楽は音楽だし」と考えたそのあなた！実はこれらの事柄には、密接かつ重要な繋がりがあつたのです。

今回私たちゼミ生一同は「音楽と政治にはどんな繋がりがあつたのだろう」という疑問を出発点として、「フランス革命下（1789～1799）の音楽」というテーマに辿り着きました。フランス革命は、民衆によってそれまでの政治形態であった絶対王政が打倒され、政治的にも社会的にも近代化が進んでいく大きなきつかけとなつた出来事です。それにも関わらず、私たちはこの大変動の時代にどのような音楽が好まれ、疎まれ、そしてどういった音楽状況だつたのかについて、ほとんど何も知りませんでした。

政治的大変動を迎えた時期の音楽状況を知らたい、という理由で決まつた「フランス革命下の音楽」というテーマ。「小難しいことは嫌だ」などと敬遠せず、この機会に私たちと一緒に考えてみませんか？

## 革命下のコンサート

パリにおけるコンサート活動は、旧体制末期には非常に活発なものとなつていました。音楽は社会のあらゆる身分階層に浸透し始め、「公開で有料のコンサート」という発想が少しずつ芽生えてきていたのです。

しかし、フランス革命の勃発により、コンサート活動は一時的とはいへ衰退しました。革命期、音楽は革命を推進する方向へ民衆を煽動するための重要な手段の一つとして共和主義者たちに捉えられており、「政治的意図や目的をもたない」コンサート活動は存続が難しかつたのです。

どれほど音楽好きの人でも、頭上を砲弾が飛び交うなかで、自分の楽しみのためだけにコンサート活動を存続させることは不可能でしょう。つまり、コンサート活動のようなタイプの音楽が発展するためには、社会の安定が必要不可欠だつたのです。

## 革命祭典と革命歌

フランス革命勃発時、民衆は事あるごとに祭典を実施しました。祭典とはその名の通り「祭り」であり、革命が起きた時、民衆は

自らが結束する為に祭典を行つたのです。楽隊を先頭に、民衆は会場まで行列を作り、会場では全員で革命歌を歌いました。

祭典には、身分や性別、年齢に関係なく多くの人々が参加しており、例えば政治家、兵士、農民などの姿が見受けられたようです。祭典とはまさに、フランス革命のスローガン「平等」と「自由」を伴つた集まりでした。祭典を数多く開くことで結束した民衆は、「絶対王政」という強大な権力に対抗することができたのです。

祭典で歌われた革命歌は、いわば「歌う者の心をつにつにする歌」とでもいえる存在でした。革命歌は、いつでもどこでも、誰でも歌える歌となるべく、単純で覚えやすいものである必要がありました。革命歌の普及には、この時代に印刷技術が発展し、農民、つまり後の義勇兵の識字率が上昇していたという背景が大きく関係しています。パリに進軍する義勇兵達の中で歌われたからこそその革命歌なのです。革命歌は、同じメロディーの繰り返しであつたり、歌詞がわかりやすくなければ広まらず、また、進軍用の歌であるために2拍子系で、行進のテンポでなければなりません。専門教育を受けた音楽家では

なく、民衆が演奏者となる革命歌において、わかりやすさこそが何よりも大切だったのです。

これらの革命歌の例として最も有名な曲は、『ラ・マルセイエーズ』でしょう。『ラ・マルセイエーズ』を作曲したのは、フランス軍の中尉であったクロード・ジョゼフ・ルジェ・ド・リールです。この曲は作曲されてからすぐに各地方に広まり、1795年7月14日には国歌に制定され、現在でも歌われています。

フランス革命において、革命歌は民衆へ音楽をもたらしました。民衆は、革命歌を支えとして戦場へ臨み、革命を成し遂げたのです。

## 革命下のオペラ

ルイ14世以降のフランスで盛んであったオペラにも、フランス革命の影響が現れました。その中でも特にオペラ・コミックというジャンルにおける変化は著しいもので、このことは作品数、内容などから見てとることができま

す。この理由には、革命期の政府が演劇を通じて愛国的士気を高めることが有効であると考え、これを奨励したこと、もう一つにはフランス革命期という同じ時期に、二つのオペラ・コミックのための歌劇

場——オペラ・コミック座とフェドー座——が華々しい活動を展開し、互いを高めあっていたこと、これら二つがあります。

オペラ・コミックは、パリ市内の定期市場で行われていた下層階級を対象としたどたばた喜劇から生まれたとされています。オペラ・コミックの作品数や内容の変化は、フランス革命によって中・下流階級の立場に変化があったことによるものだということができて

## 音楽教育革命

対して、革命による上流階級の衰退は、パリ・オペラ座に大きな影響を与えました。オペラ座は、かつて王の庇護下にあり、パリ市に経営権が譲られたのちも大きな権力を行使していました。しかしフランス革命期のオペラ座は、ヴェルサイユ宮廷の影響を強く受けた革命以前の演目内容を取りやめ、革命政府の顔色をうかがいながら、細々とした活動を行わざるを得なくなりました。

旧体制下のフランスでは、学問における公的な教育に関心が向けられることはありませんでした。音楽教育も例外ではなく、一部の

ごく限られた人間しか専門的な音楽教育を受けることはできませんでした。旧体制下での音楽教育は、主としてメトリーズ(王立歌唱学校)という、基本的に教会に携わる音楽家を育成するための機関が行うべき事柄だったのです。

ところが、革命期の教育では、自由と公教育というものに論点が向けられました。教育学という面から見ると、フランス革命は「公教育の革命」なのです。公教育化を求める革命の風潮のなか、国民公会の法令によってパリ音楽院が創立され、メトリーズが廃止されました。フランス革命によって成し遂げられたパリ音楽院の創立は、音楽教育の公教育化を果たしただけでなく、19世紀ヨーロッパや欧米諸国の音楽学校のモデルとなっていくのです。

## 主要参考文献

- 今谷和徳、井上さつき『フランス音楽史』春秋社、2010年(請求記号●J17-580)
- 海老沢敏『パリ音楽院創立とその余響——フランス革命が切り開いた道——』音楽芸術1989年7月号(請求記号●P639/47(7))
- 竹原正三『パリ・オペラ座——フランス音楽史を飾る栄光と変遷——』芸術現代社、1994年(請求記号●CS8-806)
- 立川孝一『フランス革命と祭り』筑摩書房、1988年(請求記号●J33-503)
- ブラス、アデアリード『革命下のパリに音楽は流れる』春秋社、2002年(請求記号●J97-203)
- 松島鈞『フランス革命期における公教育制度の成立過程』亜紀書房、1968年(請求記号●J15-517)
- 松田智雄『音楽と市民革命』岩波書店、1985年(請求記号●CT7-330)
- 吉田進『「マルセイエーズ」物語』中公新書、1964年(請求記号●CS8-922)
- リンガー、アレクサンダー『西洋の音楽と社会7』ロマン主義と革命の時代』初期ロマン派音楽の友社、1997年(請求記号●C61-491)



©EMUNI

※研究発表会の日程「フランス革命下の音楽」  
日時：2011年11月25日(金) 16時30分開演 場所：6号館110スタジオ